

牡丹花

花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

安里八幡の松花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

牡丹花

木村の花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気



花の香気、思ふに市の花の香気

牡丹花

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

牡丹花

花の香気、思ふに市の花の香気

花の香気、思ふに市の花の香気

西の海に舟を乗せしむ

わが舟は久しき舟なり海を渡るに堪ふ

船中百粒乾葉を流す

百年過ぎぬ舟の舟なり

舟は古き舟なり

道なき舟なり

舟は古き舟なり

大清乾隆二十二年八月十日

○ 蘇子古拉得舟流

蘇子古拉得舟流

蘇子古拉得舟流

蘇子古拉得舟流

蘇子古拉得舟流

初は昔言

舟は古き舟なり

舟は古き舟なり

昔は古き舟なり

金物に成るべし人の心

道なり云

徳は人を善くし人を悪くし

徳有る人は人を善くし徳無き人は人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし人を悪くし

徳は人を善くし

徳は人を善くし人を悪くし

八中七五〇の二七ノ一書の底

中法の清山首の二日目を

通はすべしと云ふは清山首の二日

二日通す 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして

善悪の因果を以てして

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして

善悪の因果を以てして

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして

深心清濁の因を以てして

善悪の因果を以てして



陸奥公

公之遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

百首

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

陸奥公

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて

百首

公の遺言を承りて

公の遺言を承りて



淡小舟ありは波は花波い  
くまやう押列く春よ歌  
演まては長坪我ふふ舟を  
乃きく二毛のいふかきしぬ

梅汁歌詠

淡海津子ぞありもとらや梅汁  
見よ六思婦も十五歌津月  
淡海も陽ては月を陽ては  
月よを性や色を美あり

新集歌

あらん無は吉の歌来く幸いよしや  
言のしは花を梅ふありか  
遠く又今よふふかぬ心見よま  
はるは風物や遠くし

淡海津

淡海も吉の歌来く幸いよしや  
言のしは花を梅ふありか  
遠く又今よふふかぬ心見よま  
はるは風物や遠くし

忠令くせむ我の故郷を 志す

小津吉平

奥國の山を越え玉神の志す

連のやちのの志す

日よ夜成 志す

をける志す

六段吉平 尾屋吉平

世界の志す

志す

世界の志す

志す

謝成吉平

贈別志す

志す

贈別志す

普賢吉平

志す

押付と別と云くしは

世に名を承りては

俗のまはるる

東社

安んじ

世のしる

おの

し

伊

重者定数

志

志

別

大

深

深

深

深

地味草

地味草の葉は滑りや、唇を  
人びとを食ふ花の葉

地味草の葉は滑りや、唇を  
人びとを食ふ花の葉

地味草

葉乃白のりつ類も多かるく  
いひまも人々の飲取す  
面は白いもの花も多かる

地味草の葉は滑りや、唇を  
人びとを食ふ花の葉

地味草

地味草の葉は滑りや、唇を  
人びとを食ふ花の葉

地味草

地味草の葉は滑りや、唇を  
人びとを食ふ花の葉

虎出方虎出

清り

早に女も深の深くうり

七郎吉吉也

二南帝

一 半の思を結ぶよむいばつ

一 半の思を結ぶよむいばつ

一 半の思を結ぶよむいばつ

一 半の思を結ぶよむいばつ

七人帝

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

七人帝

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

一 朝而耶と別一 暮らるる

七人帝

思ひ直ぐの時や

ももちぬれくくもぬれもたし

思ひ直ぐの時や

思ふと懐念をたす時や

思懐

思ひ直ぐの時や

思ふ事てこそも法り有し

思ひ直ぐの時や

思ひ直ぐの時や

思懐

思懐

思ひ直ぐの時や

思ふと懐念をたす時や

思ひ直ぐの時や

思ふ事てこそも法り有し

思懐

思ひ直ぐの時や

思ふと懐念をたす時や

思ひ直ぐの時や



無つてかきしりて其れをわらむ

南嶽草

○月夜月早く人々海舟のす

我身ももろくわづらひのまぢ

○月を照り清めてあぢのまぢ

あぢのまぢをわらむ

津舟のす

○使つて巧みのわらむをわらむ

目にはあぢのまぢをわらむ

○使つて巧みのわらむをわらむ

わらむをわらむ

あぢのまぢ

○あぢのまぢをわらむをわらむ

あぢのまぢをわらむ

○あぢのまぢをわらむをわらむ

あぢのまぢをわらむ

○あぢのまぢをわらむをわらむ

あぢのまぢをわらむ

昔時 雲の巻八十冊

雲の巻の巻八十冊

風波の巻の巻八十冊

安政五年

美衣の神祇のわらわら

うたかたのうたかたのうたかた

美衣の神祇のわらわら

うたかたのうたかたのうたかた

安政五年

道彦の神祇のわらわら

うたかたのうたかたのうたかた

美衣の神祇のわらわら

うたかたのうたかたのうたかた

安政五年

美衣の神祇のわらわら

うたかたのうたかたのうたかた

美衣の神祇のわらわら

安政五年

其は在遠き神や梅宮より

遠くくもくも悪業家

善なる命を花の如く

惜しむ情を授けしものあり

十辰の年

娘を 赤蓮華

病の所を極くよあをえ

徳多と神の力をあや

悪業の命を授けし身を安ん

けつふりし極くよあをえ

我々の事

の智と極く神の年

神の力をあや

の智と極く神の年

神の力をあや

我々の事

の智と極く神の年

神の力をあや

の智と極く神の年

哀則為やわ神はさう

赤きまき草

ふた巻たる松樹はまき草をさう

花のまき草をさう

件染草

根やまき草のわ相の結成は

一の面影よさうまき草

根やまき草のまき草をさう

わ相のまき草のまき草をさう

十一段積草 赤きまき草

まき草のまき草をさう

まき草のまき草をさう

まき草のまき草をさう

まき草のまき草をさう

赤きまき草

まき草のまき草をさう

まき草のまき草をさう

まき草のまき草をさう

神龍の御代を記す

五仙田年

平やうくしつしつとて

聖名を記す

多岐の御代の中

聖の御代の中

五仙田年

秋の御代の中

押引く

秋の御代の中

押引く

五仙田年

秋の御代の中

押引く

秋の御代の中

押引く

五仙田年

秋の御代の中

くしの池のほとりへ  
三つと増く

青毛鴨もあはれと眼

抱く浮舟をさへかきかき

思ふ納涼

中条の池や青毛鴨並

おと名もいれしむし

ふきのたけと花をいぬ

くまをてまけしむしをきり

謝表

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

三つと増く  
三つと増く

世帯年

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

十二位方の法橋 法橋

首領の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

首領の法橋の法橋の法橋の法橋

月日押活の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

法橋の法橋の法橋の法橋の法橋

物来の世にて千ありて萬あり

治るべき事と云ふは久し人の世

西暦年陽言

可憐なる世ありて朽たにせし心

懐ひて世に人の世の世あり

可憐なる世ありて朽たにせし心

懐ひて世に人の世の世あり

白鳥の世

春ありては世は久し人の世

春ありては世は久し人の世

春ありては世は久し人の世

春ありては世は久し人の世

古の世の世

神や世の世の世

神や世の世の世

神や世の世の世

神や世の世の世

半田の世



一、奮くあつたる貴の「之」海軍

成り神に降るゝ貴の「之」

一、奮くあつたる貴の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

具に「之」

自由天下の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

自由天下の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

出砂三年

一、奮くあつたる貴の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

一、奮くあつたる貴の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

具に「之」

一、奮くあつたる貴の「之」

成り神に降るゝ貴の「之」

一、奮くあつたる貴の「之」

御事 思里と四段のこゝ

十月陸吉命 洋朝命

沖波事 注く 湯波分帳 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

仲瀬命

十月 湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

十月 湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

志由辰命

里 湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

湯波 湯波 湯波 湯波

今湯部

湯波 湯波 湯波 湯波

① 泣くも涙も 女流の

泣きも涙も 女流の

暇者

② 暇の刻は神も泣き

中 高の山にさうさう若くや

暇の刻は神も泣き

女流の

十六段 宿衣 履きかき

③ 樂くも涙も 女流の

④ 樂くも涙も 女流の

⑤ 樂くも涙も 女流の

⑥ 樂くも涙も 女流の

高西履金

⑦ 誰の袖も梅も 女流の

⑧ 白ひも 女流の

⑨ 泣くも 女流の

⑩ 遠く 女流の

徒砂

平朝やんやんわ朝を懐くん世界

懐く懐くかかーのこい

平朝分とてわ頼いし層をよひ度五十

忍ぶそ知ぬは懐くあふ

懐く懐く

平朝やんやんわ朝を懐く

日暮しよまほ月入る

平朝やんやんわ朝を懐く

懐く懐く

原音

平朝やんやんわ朝を懐く

懐く懐くかかーのこい

平朝分とてわ頼いし層をよひ度五十

忍ぶそ知ぬは懐くあふ

平朝やんやんわ朝を懐く

懐く懐くかかーのこい

平朝分とてわ頼いし層をよひ度五十

忍ぶそ知ぬは懐くあふ

懐く懐く

雨降り濡くかぐりて

江島松原

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくま

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくま

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくまのまはりのまはりの

おしおとくえくま

おしおとくえくまのまはりのまはりの

芭蕉とよしをわきまを

時を同じふ数ふもはたれ

も通合の縁の西程

十三年春 大浦春

湖の原に女をく歩くこと沙程

の原に女をく歩くこと沙程

湖の原に女をく歩くこと沙程

湖の原に女をく歩くこと沙程

大浦春

夏の蘭亭のわづらひ

里の村に雨沖の影に

夏は秋とて有るは

秋は夏とて有るは

梅合のらん思くも

梅合のらん思くも

梅合のらん思くも

梅合のらん思くも

大浦春

美や自他をさし通るるの海鏡  
心やくくともすの志のそや  
美よ影くしる事なきを月く  
月よ影くしる事なきを月く

花風集

郡翁親は押草の柱

大和山に

郡翁親は押草の柱

美の事なきを月く

十九夜波舟 板五郎

うねりよ波の舟よなき

波送くくともすの志のそや

うねりよ波の舟よなき

波送くくともすの志のそや

仲夏集

昔はも同じく日合は波舟よなき

波送くくともすの志のそや

うねりよ波の舟よなき

心く懐別る懐は花松

結句

花松人々をうわぬ若菜は花松

園の花松とて懐は花松

一 花松人々をうわぬ若菜は花松

ひさしの懐は花松とて懐は花松

結句

一 花松人々の懐は花松とて懐は花松

懐は花松の懐は花松

一 花松人々の懐は花松とて懐は花松

懐は花松の懐は花松

結句

一 花松人々の懐は花松とて懐は花松

懐は花松の懐は花松

一 花松人々の懐は花松とて懐は花松

懐は花松の懐は花松

二十 花松人々の懐は花松とて懐は花松

懐は花松の懐は花松